

こらっせ便り



2016年1月8日

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008

Eメール : info@korasse-kanagawa.org

あけましておめでとうございます

「福島子ども・こらっせ」事務局一同

昨年、9月5日に避難指示が解除された直後に、お礼と報告書を届けるために榎葉町の教育委員会、いわき市の榎葉小・中学校を訪問し、子どもたちの現状をお聞きしました。2017年4月からいわき市の仮設校舎を閉鎖し榎葉町での授業再開となるために、生徒数が激減することはすでにお知らせしていましたが、4月の新学期から生徒数の減少がはじまるということです。とりわけ、中学校に入学する小6、小学校の新入学生の中で、榎葉に帰還しない子どもたちは榎葉小・中学校ではなく、居住している近くのいわきの小・中学校に入学することになるだろう、いわきから榎葉へのスクールバスも運行しないことを決めたとのこと。子ども・保護者は苦しい選択をせまられています。



プログラム振り返り会で大学生と

全町への避難指示解除で、原発事故による福島の苦しみと矛盾を真っ先に体現している榎葉の方々、行政、そして子どもたち。私たちはその困難さを知ることしかできず、もどかしく思います。

私たちには些細なことしかできませんが、今年も榎葉を知りながら、子どもたちと楽しくプログラムをおこないたいと思います。今年もご支援をよろしくお願いいたします。

「いのち神奈川」で文科省・復興庁と交渉

事務局長 遠野はるひ

昨年、11月24日、参議院議員会館会議室で、保養を行っているグループのネットワーク・「いのち神奈川」のメンバーは、今回も那谷屋事務所を窓口にして文科省・復興庁と交渉をおこないました。文科省からは生涯学習政策局青少年教育課の湯澤麻起子・嘉数松悟さん、復興庁からは北中摩耶さん、「いのち神奈川」側の参加者は7団体13人。那谷屋事務所から前川秘書と荻原秘書に同席していただきました。

3.11直後から、福島の子子どもたちを対象にした「自然体験・交流活動支援事業」という名称で補助金がでていますが、従来は福島県内で実施する活動だけに適用可能な補助金でした。しかしながら

、「いのち神奈川」をはじめとする保養グループからの強力な要請もあり、文科省は 26 年度から福島県外で実施する交流活動にも、約 3 億 6 千万円の予算をつけました。この補助金は当初 2 年間の予定で、26 年度は文科省の予算から、27 年度は復興庁の交付金として供出されましたが、28 年度以降はどうなるのか。交渉は「いのち神奈川」があらかじめ提出していた要請文書—26・27 年度の実績、28 年度に向けての私たちの要望—to 回答するという形で進められました。



来年 4 月に戻る予定の檜葉中学校校舎

26 年度の最終実績

26 年度「ふくしまっ子自然体験・交流活動支援事業」で文科省が関わっている補助金を利用した事業の実績は、以下の通りです。

①小・中学校 524 校 (28,371 人) うち県外に行ったのは 6 校 (368 人)。県外の行先は山形県、新潟県 2 校、神奈川県 2 校、長崎県。補助金額：2 億 1034 万円

②幼稚園・保育所 405 園・所 (45,768 人) うち県外に行ったのは 154 園・所 (19,784 人)。県外の行先は、宮城県、山形県、茨城県、新潟県など。補助金額：1 億 1634 万円

③社会教育団体 7 団体 (397 人) うち県外に行ったのは 7 団体。県外の行先は、北海道 2 件、新潟県、東京都 (伊豆大島)、神奈川県、京都府、沖縄県。補助金額：1273 万円

27 年度の現在までの実績は、26 年度と同様な傾向だということです。

28 年度に向けての要望

最初に 28 年度も事業の継続をしてほしいという要請に対しては、今年度と同額の予算申請をしているとのことで、来年も継続される予定であることがわかりホッとしました。

次に、福島県と国が定めた、この補助金を利用できる社会教育団体の範囲とプログラムの実施日数についてやりとりがありました。現在、子ども会・学童・PTA などの社会教育団体で補助金を申請できるのは、福島県内の団体のみと定められているので、福島の子どもたちを県外に招待している福島県外の団体は申請ができません。また、プログラムの期間も 6 泊 7 日以上 2 週間までとされているので、実績からもわかるようにこの補助金を使い県外でプログラムを実施した社会教育団体は 7 団体、人数も金額も学校・幼稚園等と比較すると一桁少ない状況です。

そこで、昨年に引き続き、①福島県外の社会教育団体も単独でこの事業を申請できるようにしてほしい、②6 泊 7 日以上を短くしてほしいという要望をだしていましたが、この 2 点に関しては残念ながら期待できる回答はありませんでした。

「いのち神奈川」のメンバーは、県外で実施している「保養・交流」の経験を通じて、福島の子どもたちにとっても、受け入れる側の県外の子どもたちにとっても、得るものが大きいことを、具体例をあげて次々と発言。6 泊 7 日以上期間についても、施設の確保・世話をするボランティア・保護者の休暇などの制限からどれだけハードルが高いかを訴えました。

福島の子どもたちの健康・体力低下について文科省の方で原因究明と対策をしてほしいとの要請に対する回答では、文科省は福島県まかせという現実が判明したので、文科省として独自に現実を把握し対策を立ててほしいと強く申入れをしました。

最後に福島から参加してくださった吉野さん (NPO 法人シャローム災害支援センター) より、独自に考

案した 50cm、1m、1.5mの高さを同時に測定できる測定器で測定した放射能に関する説明があり、文科省のお2人は交渉終了後も吉野さんの話を熱心に聞いていました。

交渉後におこなわれた「いのち神奈川」のメンバーとの話し合いの中で、福島県の社会教育団体との協力関係を構築する必要性、すでに実践している団体の例などについての情報が共有されました。「こらっせ」としても、将来もプログラムを持続可能にしていくためには、福島の社会教育団体とのコラボが必須であることを事務局会議で話し合っています。

檜葉南・北小学校、壱岐島に修学旅行 子どもたちが交流、自然を満喫

事務局 蜂谷 隆

2015年9月2日から1泊2日で、檜葉南小学校・檜葉北小学校の5年生と6年生16人が、長崎県の壱岐島へ修学旅行に行きました。壱岐市は、2012年4月から2年間、延べ10人の職員を檜葉町に派遣、災害査定や復旧工事にあたりました。こうした縁もあって、両市は友好関係を深めたもので、14年から壱岐市への修学旅行が始まりました。

わずか1泊2日でしたが、エメラルド色に光る海で、地元壱岐市立渡良小学校の児童たちと一緒に、いかだレースやシーカヤックなどを楽しみました。自然との一体感を満喫したと思います。2日目のお昼には小水浜の体験館で、両校の交流会を開催、お互いの地域についての発表やゲームなどで交流をはかりました。両市町のゆるキャラたちも参加、交流会は大いに盛り上がりました。

壱岐の子どもたちが仮設校舎にやってきた

今回は壱岐市立渡良小学校の6年生12人が、12月25日に到着して翌26日、いわき市の檜葉南・北小学校の仮設校舎を訪れました。これも14年に続き2回目です。子どもたちにとっては3か月ぶりの再会です。一緒に伝言ゲームやリズム体操、「キャッチング・ザ・スティック」というレクリエーションなどを楽しみ、交流を深めました。

また、除染による汚染土が入れられた黒い袋が山積みされた仮置き場や廃炉技術開発の施設、原発事故収束作業の中継基地になっている「J ヴィレッジ」などを車中で見学しました。壱岐の子どもたちにとって、初めて見る被災地の様子に驚きは隠せなかったと思います。地元に戻ってから「福島を訪問して」という報告をまとめたそうです。(檜葉町広報、壱岐市広報、「朝日新聞」福島版、2015年12月27日付などを参考にしました)



晴れた空のもとでいかだレースを楽しむ



「キャッチング・ザ・スティック」で交流

「キャッチング・ザ・スティック」というレクリエーションなどを楽しみ、交流を深めました。

檜葉町老人クラブからのお手紙

檜葉町老人クラブからお手紙をいただきましたので紹介します。

「こらっせ便り」でもお知らせしたように、檜葉町社会福祉協議会が運営する「空の家」のみなさまには、「こらっせ交流会」会場の提供や「こらっせユース」の学童保育応援へのサポートなど、あたたかいご支援をいただいています。とりわけ、「こらっせユース」の活動は大学生の独自企画ということもあり、松本事務局長をはじめとするスタッフの方々に、親切に対応していただき、大学生ともども事務局スタッフも感激しています。

私たちがなにかお役にたつことができないかと考えていたところ、ペットボトルカバーを製作されると聞き、「檜葉グッズ」として販売をお手伝いをすることになりました。この「こらっせ便り」を読んでもらっている皆様の中にも、すでに製品を購入して下さっている方が多数いますのでお手紙をお届けします。

これらの製品はまだありますので、ご購入希望の方は事務局までご連絡ください(代金は1つ 300円ですが、郵送の場合は郵送料が別途かかります。)

福島子ども・こらっせ神奈川の皆様

北の大地から雪の便りが聞かれる季節となりました。

さて、過日は当連合会女性部の勉強会で製作したペットボトルカバー等をお買い上げ下さり、誠にありがとうございました。

全町避難によって老人クラブ会員が全国に離散し、思うような活動ができない中、このたびの機会を得、30名近くの女性会員が集い、会話を楽しみながら製作活動を行うことができ、その売上金を活動資金として還元いただいたことで、今後の老人クラブ活動に弾みがつきました。

未曾有の大震災と原子力発電所事故から始まった避難生活が4年半となった本年9月5日に国の避難指示が解除になり、ふるさと檜葉への帰町が叶ったものの、長すぎた避難の日々は町民ひとりひとりに大小さまざまな課題をもたらしました。

そのような復興の道のりなかばの私たちを今後も見守り、応援いただければ幸いに存じます。

寒さに向かい風邪やインフルエンザが流行する季節となりました。

ご支援、ご協力くださいました皆様方のご健勝をお祈り申し上げ簡単ではございますが、書面をもって御礼申し上げます。

平成27年11月25日

檜葉町老人クラブ連合会

会長 新妻 信一

女性部長 横田 芙美子



「檜葉グッズ」と檜葉町老人クラブ女性部の皆さん



テントに間借りして「檜葉グッズ」を販売



集会で「どれがいいかな」